

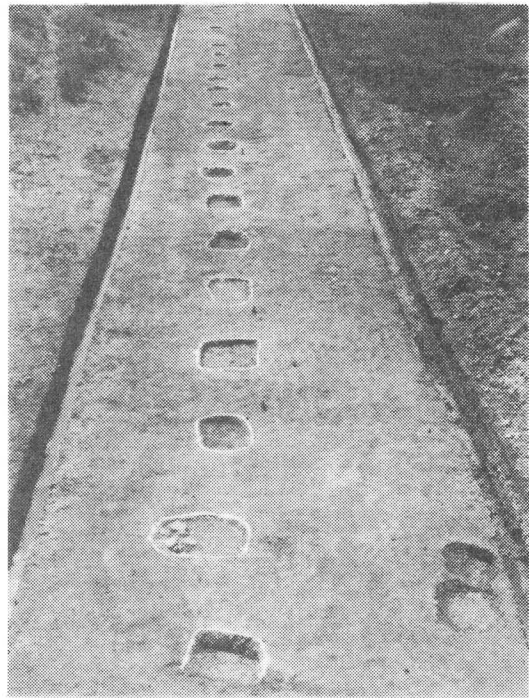
小山池の調査

(昭和54年8月～昭和54年9月)

この調査は、小山池の埋立開田工事に先だって実施したものである。小山池は明治初年頃に造られた灌漑池で、掘削や浚渫作業に伴って瓦片や礎石の出土が伝えられており、大官大寺ないし飛鳥岡本宮に関連する遺構の存在が予想されたのである。このため調査では、遺構遺存の可能性や、上記遺跡の中心により近くすることを考慮して、堤防東辺と南辺に沿い逆L字形の調査区を設定した。調査の結果、掘立柱塀1、溝2、土壇7を検出した。これらの遺構は、池底堆積土直下（部分的には暗灰色粘土層が入る）の褐色砂礫地山層上面で検出したものであり、時期的には弥生時代と7・8世紀代とに大別できる。

7・8世紀の遺構には、掘立柱塀1、溝1、土壇4がある。SA2700は、東調査区で検出した南北方向の掘立柱塀であり、20間分、総長44mを確認した。

柱穴は上部を削平されていて、深さ0.2～0.4mを留めているにすぎないが、柱間寸法2.1～2.3mに復原できた。SA2700の延長部分は、南が池底の掘削、北がSD2701の削平をうけともに不明瞭となり判然としない。SD2701は、東発掘区の北端で検出した幅28m以上の流路であり、深さ1m以上におよぶ。大官大寺所用軒平瓦(6661B)や6～8世紀初頭の土器片が出土した。SK2708～2713は、南調査区西半で検出した土壇群である。いずれも長辺3.5m、短辺2.5m前後の長方形平面をもつ

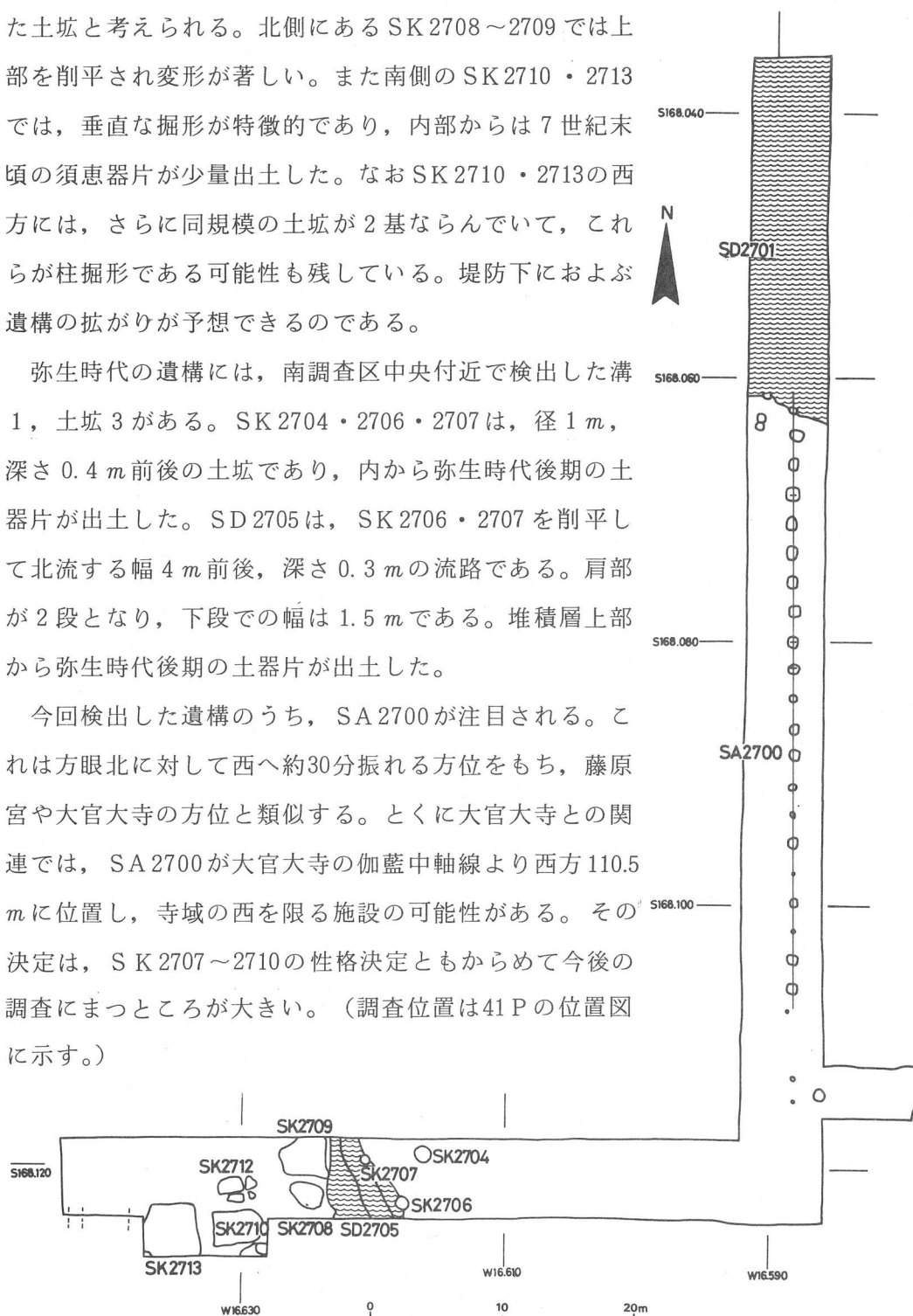


SA 2700 (北から)

た土壇と考えられる。北側にあるSK2708～2709では上部を削平され変形が著しい。また南側のSK2710・2713では、垂直な掘形が特徴的であり、内部からは7世紀末頃の須恵器片が少量出土した。なおSK2710・2713の西方には、さらに同規模の土壇が2基ならんでいて、これらが柱掘形である可能性も残している。堤防下におよぶ遺構の拡がりが予想できるのである。

弥生時代の遺構には、南調査区中央付近で検出した溝1，土壇3がある。SK2704・2706・2707は、径1m，深さ0.4m前後の土壇であり、内から弥生時代後期の土器片が出土した。SD2705は、SK2706・2707を削平して北流する幅4m前後，深さ0.3mの流路である。肩部が2段となり，下段での幅は1.5mである。堆積層上部から弥生時代後期の土器片が出土した。

今回検出した遺構のうち，SA2700が注目される。これは方眼北に対して西へ約30分振れる方位をもち，藤原宮や大官大寺の方位と類似する。とくに大官大寺との関連では，SA2700が大官大寺の伽藍中軸線より西方110.5mに位置し，寺域の西を限る施設の可能性がある。その決定は，SK2707～2710の性格決定ともからめて今後の調査にまっところが大きい。（調査位置は41Pの位置図に示す。）



小山池調査遺構配置図（1：500）